

# 令和2年度「広報ながめま」における連載記事の掲載

昨年度に引き続き、正富宏之先生に寄稿を依頼し、「広報ながめま」(毎月1回発行)に連載記事「タンチョウ博士のお話」を3回掲載した。

丹頂 (タンチョウ)



## タンチョウ博士のお話 (第23回)

### 〇タンチョウに緊急事態宣言！

カラスの騒がぬ日はあっても(?)、新聞もテレビも、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)を取り上げない日はない毎日ですが、皆さんはお変わりなく、お過ごしですか。

このウイルスに対し、4月に緊急事態宣言があり、5月に期間が延長されました。その間、ヒトは密閉・密集・密接の「3密」を選び、それで感染を防ぎ、感染者を出さないようにしたわけです。

実は、タンチョウでも、緊急事態宣言の必要性が30年前から専門家により指摘されてきました。

でも、実際に政府機関が動き出したのはここ5、6年のことです。ただ、ヒトと大きな違いは、タンチョウで悪性のウイルスにかかり、それで死んだ例はまだ報告されていない点です。

それなのに、なぜ緊急事態宣言が必要なのでしょう。それは、もし未知の悪性ウイルスがタンチョウへうつったら、悪逆の場合、一撃に絶滅へ向かう恐れがあるからです。なぜなら、ワクチンや薬の開発は、ヒトの場合でも時間がかかり、難しいの、「いわんやタンチョウにおいてをや」です。タンチョウは野外に居て密閉は避けられませんが、冬は密集・密接の「2密」の状態になるからです。



【写真1】道東の給館場で“密集する”タンチョウ

しかし、ヒトが宣言を出しても、タンチョウが「ハイ、ワカリマシタ」と自発的に2密を止めるわけではありませぬ。ヒトが手助けしない限り、危険はずっと残ります。その手助けが、分散という方法です。

タンチョウは今道内に1,700羽ほどいますが、その8割が釧路市・釧路町・釧路市の限られた給館場へ集まり冬を越します(写真1)。ヒトもタンチョウも含め、動物の体の中にいるいろいろな細菌やウイルスが住み着いています。何かの拍子でそのウイルスが、異などを通じて別の種類の動物へ移り、移った先の個体を殺してしまうことがあります。ご存知の鳥インフルエンザは、本来カモの腸の中にある無害のウイルスが姿を変え、それを受けとった個体を殺す、つまり高病原性(病気を起こす力が強い)鳥インフルエンザウイルスとして、養鶏農家に打撃を与えます。

ツルでも、九州の出水平野へ集まるナベツルやマナヅルが、鳥インフルエンザで死んだ例があります。タンチョウもいつ新型のウイルスでやられるかわかりません。それが起きてからでは手遅れです。

だったら、ツルにマスクやうがいさせられませんが、今できるのは、密集させず、分散させることです。それは越冬期だけでなく繁殖期も必要です。

今年、舞鶴遊水地で待望の繁殖活動が始まりました。道東の密集を抑え、道東への分散を進める、まさにその始まりです。地域農家の方だけでなく、長沼町の全員で、タンチョウの緊急事態宣言最終へ向けて、これからも見守っていきましょう。そのために、皆さんも新型コロナウイルスには十分ご注意ください！ツルもヒトも、ウイルスとの闘いは永遠の課題なのです。(文・写真：正富宏之)

第23回  
令和2年6月号

丹頂 (タンチョウ)



## タンチョウ博士のお話 (第24回)

### 〇ヒナが孵った、大きく育った、さあ、大空へ！

千歳川の洪水対策として、長沼町では支流の鶴瀬川に、面積約200haの鶴瀬石岸地区遊水地が造られることになりました。が、もともとこの地域は鶴瀬と呼ばれていたので、遊水地もその名に変えられ、この改名は、まさに「名は体を表す」ことになりました。

舞鶴遊水地のあたりは、かつて大きな「マオイ沼」があり、西の「オサツ沼」を含めた湿原は、タンチョウを含むツルの一大生息地でした。しかし、ヒトが沼を埋め、湿原を干拓したため、100年以上も前にツルは姿を消しました。つまり、ツルは昔話の中でしか生きていなかったのです。

1964(昭和39)年9月に、私が御路へ赴任してツルの調査を始めたころは、せいぜい200羽ほどが道東の片隅で暮らしていました。ですから、タンチョウがかつてのホームグラウンドの道東へ戻ってくることは、想像もしませんでした。そう言えば、その年の10月に東京オリンピックの開催で、日本がわきたっていました。そして今、56年の歳月を経て、再度の東京オリンピックが聞かれる(はずだった!)年に、道央圏でタンチョウの初の繁殖生活を観察できるめぐりあわせに、言い知れぬ思いを感じています。

遊水地で、今、1羽のヒナが精進に育っています(図1)。卵から孵ったヒナの姿は、首が少し長めの、二ツトりの“ひよこ”を想像してください。数日して巣を出ると、湿地を走り回るため、まず足が伸びるので、ひと月過ぎた頃の姿は、小さなダチョウを想像させます。「明け野の暁、夜の曉」の陰気のように、生後50日ほど、ヒナは主に母親の羽の下で、赤い暖をしてももらい成長を過ごします。

やがて体も白っぽい生え変わり、翼の羽が伸び、生まれて100日ほどで飛ぶようになります。ここでやっと本来の空飛ぶ“鳥”になるので、この状態を「雛初め」に似て「飛初め」と呼んでおきます。遊水地では5月24日に孵化を確認していますので、この広報がお手元へ届くのは、飛初めからひと月後です。すでに9月初旬に、家族そろって遊水地の外へ飛ぶのも確認されました。

「這えば立て、立てば歩めの親心」になぞらえて、今は「歩めば走れ、走れば飛べよの親心」とも言いたいでしょうか。ともかく、飛ぶには練習が必要ですし、最初のうちは、まっすぐ、低く、短い距離しか飛べません。しかし、飛ぶようになって安心とは言えません。なぜなら、1歳未満の幼鳥が飛んで電線衝突などの事故で亡くなる割合は、成鳥のそれよりずっと高いのです。勝手に走り出した幼鳥の後を、心配そうについて行くヒトの親の姿に、幼鳥の羽はたきに付き、急いで羽にかけた親鳥の翼が重い気がします。ヒトとツルが共に生きていくために、これらから速く家族をそっと見守って欲しいと願っています。(文：正富宏之)



【図1】飛ぶ練習。幼鳥(右)が羽ばたいて飛び上がったので、飛んで追いかけてようとう翼を広げた親(左)。(写真：正富宏之)

第24回  
令和2年10月号

丹頂 (タンチョウ)



## タンチョウ博士のお話 (第25回)

### 〇長沼のタンチョウが、私たちに示していることは？

長沼周辺の大湿地にたくさんいたタンチョウが姿を消して、100年以上経ちました。そして去年、昔に比べると「蜜の罠」の広さといえる舞鶴遊水地で、ひと組の夫婦が無事に1羽の子を育てました。

長沼の周りからタンチョウが消えたのは、ヒトが湿原を干拓し、住む場所をなくしたからです。ヒトも食べ物が無いと生きられません。陸上の天然の食べ物だけでは、大勢のヒトの胃をとても満たせません。そこで、食物をつくる環境が必要となり、その環境を作る能力をヒトは進化させてきました。

しかし、ほとんどの動物は、食物を作る環境も、そこで自ら餌を作ることもできません。自然にある環境と、自然にある餌で命を保ちます。そうした環境の残る道東で、タンチョウはなんと生き延びてきました。

そううえ、タンチョウはめでたい生きものとされ、飼育や食材に使う経済動物として本州へ輸出されました。従って、タンチョウとヒトはまさに天敵であり、ヒトから逃げることが必要でした。

しかし、前世記半ばから、タンチョウは生き方を大きく変え始めています。

その一つが、人慣れです。餌でおびき寄せて、一網打尽を狙うのが「天敵」のやり方です。が、どういうわけか、ヒトは餌を置いて、その後の一網打尽を行いません。やがて、タンチョウは、ヒトが危害を加えず餌をくれる動物で、ヒトのそばへ寄って大丈夫だと学習しました。そして、ヒトと同じく、親の振舞いは子へと伝わります。

二つめが、繁殖環境の変化です。広々と開けた湿地に巣を造るタンチョウのイメージとは裏腹に、例えば釧路では、今や約4割の巣が林の中や森に囲まれたところにあります。さらに、畑や舗装道路の脇、さらには農家の庭先と言ったところに巣を造る夫婦もいます。

こうした変化を基にして、三つめが、道東からの分散です。再発見されてから80年近く経ち、やっと道北や道央へ進出し始めました。これは、大いに歓迎すべきことです。なぜなら、道東での2密(密集・密接)の解消が少しずつ進み、ウイルス(悪性の強い鳥インフルエンザなど)による絶滅がある程度避けられる兆しが見えてきたからです。

こうして、周りの状況に応じ、タンチョウははだいに生き方を変えて命を保っています。コロナ禍や文明の発達と共に、ヒトも生き方を変えざるを得ない生きものであることを、改めて納得させられています。この思いを引き出してくれた舞鶴遊水地の繁殖した家族は、どうやら日高地方で冬を過ごしているようです。暫くして、その家族が再び長沼へ無事戻ることを、心から願っています。(文：正富宏之)



【図1】わざわざ道東の前へ来て、飛び立とうとしている家族(人慣れの例。左オス・中メス・右幼鳥)2020年9月30日舞鶴遊水地(撮影：正富宏之)

第25回  
令和3年2月号